尾上松之助の舞台と映画の関連性

――明治末期から大正初期の京都において――

大矢 敦子（立命館大学COE推進機構客員研究員）
E-mail：Atsuko.Oya@mb2.seikyou.ne.jp

はじめに

日本映画界最初のスターといわれている尾上松之助は、映画出演以前、明治20年代から中国地方を中心に旅回りの役者として生活をしていた。その後、京都・千本座の座主であった牧野省三と出会い、明治30年代半ばから京都西陣に位置する千本座で芝居興行を開始する。そして数年後、映画製作に乗り出し始めた横田商会の下、牧野が監督する映画作品に出演するようになり、昼間は主に映画撮影、夜は舞台出演という生活を送るようになる。以上のような期間が存在したことは主に映画史研究者にとって周知の事実であるが、今回の調査で京都における松之助の芝居上演期間が1903（明36）年から1915（大４）年頃までの約12年間に及び、この間演じられた作品がおよそ150作品にのぼることが判明した。特に1910（明43）年からの６年間は映画出演と舞台出演の兼務を続け、舞台と映画両方面で活躍していた松之助が、京都市内の観客の目に触れていた時期が長期間存在していた。本報告では主として1903（明36）年から1915（大４）年までの京都での松之助の舞台と映画の関係を作品・配役及び興行形態から考察し、京都で上演された舞台作品が、当時またその後の松之助映画に与えた影響を考察する。

１．役者時代の作品・配役・興行について
―1903（明36）～1909（明42）―

1－1．明治末期の京都興行界で
―役者としての不安定な位置―

明治末期における京都での芝居興行は主に南座に代表されるような大きな芝居小屋で上演される歌舞伎と千本座に代表されるような小規模な小屋で上演される芝居とがあり、主に時代の先手を行くのは南座などで芝居を上演していた役者、つまり江戸時代からの世襲制に守られた一部の歌舞伎俳優達のみであった。地方出身の役者は、盛り場であった新京極や西陣界隈を中心とする中小の芝居小屋を活動場所とし、座元との契約で上演期間が終了するとそのまま同一座で巡業を繰り返したり、その時々によって一座のメンバーを入れ替えて各地を巡業していた。

主に中国地方を廻る旅役者であった松之助が、牧野省三に招かれて京都で芝居を開始したのは1905（明38）年の千本座での興行とされている。しかし1903（明36）年２月５日三枡源九郎改め[(1)]尾上松之助一座で前狂言「浪花霊験記」、切狂言「芦屋道満大内鑑」葛の葉子別れの上演記録があることから当時既に尾上松之助として芝居を打っていたことが今回の調査で判明した（「尾上松之助芝居上演表（京都）」参照）。彼は当時三枡源五郎[(2)]一座に参加しており、郷里の岡山から大阪へ出て芝居を打っていた。この時期中村鶴三郎と名乗っていた松之助は、源五郎が一座をやむなく離れる場合に一座を任され公演を続行していたこともあったことから、座内でも若手の筆頭として名実共に座頭に次ぐ責任者だったと推測される[(3)]。演技の実力を先輩役者から評価され松之助を襲名した彼だったが、襲名直後はというと、松之助一座として座を組織し巡業を行うというスタイルが確立されていなかったとみえ、同じく関西圏で活躍していた俳優達と共に二頭体制で巡業をおこなったり他の一座に加入しての巡業も少なくなかった[(4)]。また雑誌での上演情報には松之助の名前さえ掲載されていない場合もあり、尾上松之助

の役者世界における立場が確立していなかったと言える[5]。しかし一座内での配役をみてみると、主に各演目の主要人物を演じていることから、実力をつけつつあったことは自然と想像される[6]。

1－2. 舞台作品と配役の特色

—人気映画につながるルーツ—

上演作品内容についてはほとんどが歌舞伎脚本を中心としているのはもちろんであるが、中でも映画製作が開始される1909（明42）までに演じられた約40作品中30作品ほどを時代物の作品が占めており、彼がジャンルとして時代物を得意として上演を行っていたことがわかる。また自ら十八番として列挙している作品として「塩原多助もの」の上演[7]に加え、「石山軍記もの」[8]「清正もの」[9]も２公演ずつ上演されている。特に注目すべきは「忠臣蔵」関係作品[10]の上演である。「忠臣蔵」関係作品は、1909（明42）年に集中して上演されており、浅野匠之頭から中山安兵衛まで幅広く演じている。後年、映画作品で量産される松之助の「忠臣蔵もの」の原点が京都での舞台作品にあったといえるだろう。これら作品は、千本座の座主であった牧野省三の意見が演目や演出に反映されていたと考えられるが具体的な関わりについては今後の調査課題としたい。

次に配役での特徴に移る。自伝の中で松之助は適役をいくつも挙げているが[11]、世話物に出てくる役柄や女役にも適役を認めていることから、ジャンルの広い適役の多さが旅芝居においては欠かせぬものであったと考えられる。京都での興行作品で数度演じられた「塩原多助」（1905.01.01、千本座／1909.11.13、千本座）の塩原多助役、「二蓋笠柳生実記」（1905.02.01、千本座）の柳生又十郎役、「鰻谷」（1905. 02.01、千本座）の古手屋八郎兵衛役、「大蔵卿」（1909.08.14、千本座）の大蔵卿役、「気違幸兵衛」（1909.10.14、千本座）の幸兵衛役、「千本桜/渡海屋」（1909.11.13、千本座）の平知盛役、「中山安兵衛実記」（1909.07.14、千本座）の安兵衛役など京都でも適役を多く演じていた。松之助自身が記述しているように、自分が演じられる戯作・脚本については自分の知っているものは何でも演じたということで[12]、彼の旅役者時代の努力が伺える。舞台での松之助を評する文献は少なく、三宅周太郎が幼少時代、松之助の舞台芝居に魅力を感じていたことを記しているが[13]、京都に来てからの松之助に人気があったという事実は新聞からは見られない。しかし数少ない劇評の中で、1909(明42)年７月の千本座公演で演じた「屋代騒動誉大久保」他が好評判であったことがわかる[14]。

2．映画出演開始後の舞台興行

—1910（明43）～1915（大４）—

2－1. 舞台と映画の関連興行による知名度の向上

—映画封切時期と封切順番のズレ—

1909（明42）年10月に行われた映画撮影後、浅草富士館で松之助初主演の映画作品「碁盤忠信源氏礎」（牧野省三監督、横田商会、浅草富士館）[15]が同年12月１日に封切られた。当時、封切後の映画作品は長くて半月ほどしか上映されなかったが、今作品は一ヶ月に渡って公開されていることから東京の人々に盛大に受け入れられたと考えられる。自伝によると本作は千本座での舞台上演作品であった「碁盤忠信」出演の折に映画製作の話が浮上したということであるが、実際は千本座で「碁盤忠信」に該当する作品を演じていたという事実は見当たらない[16]。

しかし1909（明42）年12月から一年間に封切られた松之助の映画作品は、京都での舞台作品の多大な影響下で製作されたと考えられる。例えば、舞台作品「御文章石山軍記」（1907.01.01、千本座／1909.10.31、千本座）の上演後に映画作品「石山軍記」（1910.01.01、牧野省三監督、横田商会、浅草富士館／同年04.11、京都南電気館）が封切られており、特に1909年に上演された舞台作品「御文章石山軍記」は８幕で映画作品「石山軍記」が９場ということから、実際の舞台を土台とし、おおよそ同じ場面を撮影し完成させたと考えられる。

また、東京と京都の映画作品の封切り時期を比較してみると、上映用のポジプリントを全国の日活直営および特約館に同時にかけられる本数を作成していなかったことが原因で[17]、封切の時期に若干の遅れがみられる。まず、東京浅草で「碁盤忠信源氏礎」が封切られた二ヵ月後の1910（明43）年2月になって京都ではようやく北電気館で「大石内蔵之助」（1910.02.25、牧野省三監督、横田商会）が上映されている。続いて3月「木村長門守」（1910.03.01、牧野省三監督、横田商会、京都南電気館）が封切られ、三番目に「碁盤忠信」（1910.03.21、牧野省三監督、横田商会、京都南電気館）が封切られるというように、ただ封切が遅れるだけでなく東京での興行とは若干封切り順も違っている。

しかしこうして生じた封切時期と作品順番という二つのズレのために、松之助は京都市内で役者及び映画俳優として、売り込みを精力的に展開していくことができた。具体的には、京都で初上映された松之助映画である「大石内蔵之助」（1910.02.25、牧野省三監督、横田商会、京都北電気館）が封切られた直後に千本座で舞台作品としての「大石内蔵之助」（1910.03.14、千本座、6場）を松之助自身が演じている。また「中山安兵衛高田馬場仇討」（1913.01.01、末広座）の舞台上演後に「義士中の名物男　堀部安兵衛武庸」（1913.03.05、牧野省三監督、日活、京都中央館）が上映されている。

このように舞台として上演された作品が映画化され京都で再びスクリーン上に現われるといったサイクルと、映画封切時期のズレを利用した舞台作品の上演が少なくとも明治末期から大正初期にかけて続けられたことによって、松之助は自らの肖像を繰り返し京都の観客に植え付けていった。役者また映画俳優としてこうした興行形態を続けていくことによって、松之助は京都の大衆に自らの存在を訴えかけ、その後の映画俳優としての人気の土台を築いた。

2－2. 舞台興行の工夫
—時代の流行を捉えた興行—

松之助が映画に出演するようになってからも舞台芝居の興行は続けられたが、ここでは映画出演以前の舞台作品との相違点をみていきたい。明治末期に大阪の曾我廼家五郎・十郎による兄弟劇によって喜劇という劇形態が生まれてから、各劇場でもこぞって喜劇芝居の興行をおこなうようになっていった。1909（明42）年頃は京都の各劇場でも喜劇芝居が流行しており[18]、千本座でも時流に乗って喜劇作品を取り入れ、松之助一座でも1910（明43）年から大々的に喜劇作品を上演することになった[19]。具体的には、京都で松之助が関わった興行の全70公演中20公演で喜劇作品が上演されており、特に頻繁に上演された「田舎の先生（カンツリチーチヤー）」と「恋の太刀風」は1910（明43）年～1914（大3）年の5年間に前者は3回、後者は4回の上演を数える（上演表参照）。当時、喜劇が流行していたとはいえ、歌舞伎芝居を中心とした一座で喜劇が演目に入っていることは珍しいことだった。特に固定の芝居小屋で喜劇を入れ込んだプログラムが長期に渡って公演された例は他にみられず、この時期の松之助一座の特徴と言える。また明治の上演記録から「田舎の先生」で教員疋田、「競争むこ」で紳士朝山、「女尊男卑」では婦人令子などを演じており松之助自身も現代喜劇に出演し、作品によっては女形も演じていたことが判明した。これら喜劇芝居は映画化されることはなかったが、同時期に封切られていた松之助映画作品にはない趣向が、舞台上で見られていたことは特筆すべき点である。

また、文壇・劇界で一大ブームを巻き起こした柳川春葉原作「なさぬ仲」も1913（大2）年に上演されている。この作品は一人の子供を巡って生みの親と育ての親が交錯するという内容が、男女の愛憎劇の中で描かれ、新派悲劇として舞台化されるのが基本であったが、松之助一座ではこの作品が「時代劇」として上演されている。詳細は不明であるが新派劇をアレンジして興行していたことが興味深い。また興行形式的にも工夫をこらし

ており、続き物として二回に分けての上演形態を取っている（上演表参照）。

以上の作品以外にも松之助一座は、廓を背景とした作品や世間の男女間の痴話を題材にした作品も大正期に入ってから数多く上演しており[20]特に1915（大４）年に入ると、前狂言に世話物を組み入れる興行になっている。これら世話物作品も同時期に映画化されることはほとんどない[21]。各作品は主に歌舞伎種の演目と並んで上演最後に演じられており、毛色の違う作品を入れることによって、映画では見られない松之助を舞台芝居での見所とし、集客を狙う思惑があったと考えられる。

2－3. 松之助の忍術映画
—舞台作品を超えて得た人気映画作品—

松之助の忍術映画が人気を極めたのは、1916（大５）～1917（大６）年頃と言われているが、その源流の一つといえるのが、1909（明43）年５月に千本座で上演した「四季模様白縫譚」（８幕）である。松之助は、若菜姫（若菜娘）・秋作・浪六の一人三役を引き受けており、その後全く同じ題名の演目を末広座で出していることからも[22]、この作品が松之助の十八番の一つとなっていたと考えられる。また主人公として位置づけられる若菜姫は蜘蛛の糸を操る妖術使いであったことから、映画作品「渋川伴五郎」（1922年、辻吉郎監督、日活）で見られるような糸を使った演出が当時の舞台でもなされたことが想像できる。この作品は映画作品として一年後に「筑紫奇談　蜘蛛の妖術　白縫物譚」（1914.05.20、牧野省三監督、日活、京都帝国館封切）として上映されており、忍術を扱う作品が映画として受け継がれていくことになる。

逆に松之助の代表作として有名な「児雷也もの」は、映画作品として封切後に舞台で上演されているパターンで、「豪傑物語　天下一品　実録児雷也」（1914.03.21、監督不明、日活、京都帝国館封切）が上映された翌年、「傾城児雷也物語」（1915.01.14、末広座）として上演されている。松之助自身、舞台作品での適役に児雷也を選んでいないことから[23]、上演の機会は少なかったまたは上演事実があったにせよ、客の反応があまりなかったものといえる。しかし、映画作品として彼が児雷也を演じたとき、舞台ではみられなかった魅力が映画では発揮されたと推測される。これに関する映画でのトリック撮影などの技術効果も含めた具体的な考察は稿を改めたい。

3．映画俳優としての活躍
—1910（明43）～1914（大３）—

3－1. 日活創立の周辺
—映画製作数と封切館—

明治末期の日本映画界は、大手四社であったM・パテー、福宝堂、横田商会、吉沢商店の作品・興行面での競争が激化していた。その後、時代は四社によるトラスト発足へと移り、横田商会も一旦は買収を拒むが、最終的に1912（明45）年７月には買収に応じることを決定した。その直後、牧野省三はストックフィルムを大量生産することを命じられ[24]、一ヶ月に30本以上の作品を量産したと語っている。牧野省三の下で映画出演をしていた松之助がこれに駆り出されたことは想像に難くない。また、横田商会は最大のライバル会社であった吉沢商店と、作品の内容や質に加え興行の違いについても比較されていた[25]。資本金の多少のみならず、撮影所の建設など吉沢商店は横田商会にとって一歩先行く存在であり、吉沢商店が着実に「日本もの」フィルムを量産し続けていったことは大きなプレッシャーを横田に負わせたと考えられる。こうした競争に打ち勝つため、弱点であった日本物の製作に力を入れる必要に迫られていた横田は、1910（明43）年京都で最初の撮影所として二条城撮影所を設け松之助作品を量産していくことになる。

松之助の顔が売れた背景には、日活会社設立に伴う興行館の増大も影響しているといわれている。京都においては、それまで横田系列であった北・南電気館及び中央電気館らだけでなく、老舗劇場から常設館となった歌舞伎座を筆頭として京

都市内の大半の活動写真常設館が軒並み日活の直営または特約館として契約され、10館以上の常設館が日活の映画を上映していた時期が存在した[26]。しかしそれら総ての館で松之助の映画が上映されたというわけではない。例えば歌舞伎座・パテー館・三友倶楽部などでは主に欧米からの輸入作品が封切られ、新派作品も以上の館を含め数館で封切られていた。松之助作品は中央電気館・オペラ館・千本座などで主に封切られ、封切館の数としては横田商会時とあまり大差は無い。しかし、製作サイクルは大正元年になって一気に増加しており、多い月で一ヶ月に8作品が封切られていた[27]。

3－2. 活動写真俳優としての人気
—新聞紙上での売り出し—

活動写真俳優として新聞広告に名前があがることは、その俳優の人気を表すことにもなる。明治末期、活動写真が興行の一つとして加えられ始めた時期の新聞演芸欄また広告欄には、封切日に加え上映小屋や劇場の名と題名のみにとどまることがほとんどであった。それが大正時代に入った頃から、まず幕数・場数・尺数を掲載するようになり、準じて会社名・活動弁士名・薩摩琵琶弾奏者名・俳優名また作品の見どころやその他の情報が年を追って紙面を賑わすようになっていく[28]。具体的な流れを追っていくと、1912（大1）年に京都オペラ館で封切られた「寛政曽我　小金ヶ原大仇討」（1912.01.21、監督不明、日活）では場数の情報に加え、1－12の各場面内容が掲載されている。また、同年に同館で封切られた「安中草三郎」（1912.02.01、監督不明、日活）でも同じく1－10の各場面内容が掲載されている[29]。続いて翌年には、京都帝国館で封切られた「徳川の礎旧劇　大久保漫遊記」（1913.09.01、牧野省三監督、日活）で「日本活動写真株式会社大傑作」といった映画会社名を宣伝に使用するようになり、その一年後の「旧劇　稀世豪傑　宮本無三四」（1914. 04.15、牧野省三監督、日活、京都中央館封切）では「日本活動写真株式会社関西撮影部最近ノ大作」といったように、会社名だけでなく製作している部署名まで宣伝として掲載していることがわかる。そして2ヶ月後「旧派大活劇　江戸の花　巽の櫓」（1914.06.01、監督不明、日活、京都中央館封切）で「尾上松之助十八番ノ内」と初めて尾上松之助の名前が映画作品の宣伝として掲載される。その後、会社名である日活と出演俳優である松之助の名前は日活直営館の新聞広告欄で頻出していく[30]。当時、旧劇として歌舞伎作品が映画化される場合、人気を得ていた大歌舞伎の俳優名が広告欄に掲載されたり、他の俳優名が広告欄で見られることはあってもそれは1914（大3）年頃に関して言えば一年に1～2作品[31]見られるだけで、固定の活動写真常設館で、しかも映画会社の旧劇俳優として大々的に売り出されていた俳優は松之助だけであったといっても過言ではない。つまり、新聞紙上で売出されることによって、認知度とそれに付随する人気を急速に得ていったと言える。それをよく表す興味深い事実として、当時関西を中心に義士劇で人気を博していた片岡松之助[32]という役者が出演する芝居小屋に尾上松之助が出演すると勘違いして芝居を見に行った観客が大勢いたことが挙げられる。その後新聞の演芸欄では二人が別人であると注意を促し、混乱の沈静化に努めている[33]。こうして新聞に自らの名前が出始め、映画俳優として人気を得はじめた松之助は、2年後には活動の主軸を舞台出演から映画出演へ移していくことになった。

おわりに

明治末期から大正初期にかけて松之助は、自身の舞台作品を内容的にも興行的にも映画作品を売り出すために効果的に利用していった。芝居小屋と数館の活動写真常設館で、新京極と西陣界隈で、京都の東西数箇所の興行場所が松之助作品を上映または上演することによって、彼の京都での知名度は坂道を駆け上がる如く一気に上昇していったと考えられ、映画に出始めてわずか数年で松之助は役者及び俳優としての知名度を確実に上げていった。1912（明45）年の千本座の舞台興行では

「活動写真でお馴染みの尾上松之助」[34]といった記述がみられ、活動写真という媒体を通して松之助の人気が高まっていったという一端を明示している。こうして京都で生まれた松之助ブームは常設館の地方進出に伴い、滋賀などの周辺地域へと波及していった。

松之助の映画作品や興行に関わる原点が京都で演じられた舞台作品と舞台興行にあったということが今回具体的に判明したが、彼が映画出演に主軸を移して以降の映画作品及び興行の具体的変遷については、今後の研究課題としていきたい。

注

（1）「楽屋すゞめ」（『大阪朝日新聞付録』1903年2月5日）には「三枡源五郎一座」とあることから三枡源五郎の誤字の可能性もある。

（2） 三枡源五郎（生没年不明）：主に関西を中心に活躍した役者。「西海奇聞霧間原」の金太役、「白縫譚」の浪六役で当りをとっていた。立役と女形を兼ねていたが晩年は女形を中心に実事を演じていた。

（3） 松之助が25歳頃を思い起こして語ることには「当時は三柳源五郎氏と一座して神戸三の宮朝日座（今の歌舞伎座）に打っていたが、源五郎氏が帰阪後、私は主任となって同座を引き受けていた。」（『尾上松之助自伝』尾上松之助、1921年、春草堂出版）。

（4） 片岡市之正や嵐栄次郎、嵐橘楽といった俳優たちと一座を共にしていた。

（5）『演芸画報』（13号、演芸画報社）では1909（明42）年10月31日からの千本座公演と同年11月13日からの千本座の出演者が梅暁橘楽友太郎一座とのみ記載され松之助の名前は外されている。

（6） この間の新聞演芸欄では松之助の名前は片岡市之正や嵐栄次郎などの次に書かれており、彼等俳優より松之助が一枚下であったと推測できる。

（7）「経済鑑塩原多助」（1905.01.01、千本座）と「塩原多助」（1909.11.13、千本座）の上演で松之助は塩原多助役。

（8）「御文章石山軍記」（1907.01.01・1909.10.30、千本座）。

（9）「後日の加藤」（1905.01.01、千本座）、「清正公後日誉」（1908.01.01、大手座）。

（10）「義士銘々伝」（1906.11.30、千本座）、「忠臣蔵後日建前」「中山安兵衛実記」（1909.07.14、千本座）、「仮名手本忠臣蔵」（1909.08.22、千本座）、「赤穂義士伝」（1909.11.30、千本座）の5作品。

（11） 少年時代：『二十四孝』の横蔵、『安達ヶ原』の貞任、『しやべり山嫗』、『布引』の実盛。青年時代：『矢口』のお舟、藤や伊左衛門、石井常右衛門、柳生又十郎、『蘭平物狂』、小野道風、法界坊、和国橋藤次、いろは新助、大蔵卿。得意十八番：一条大蔵長成、塩原多助、丸橋忠弥、『千本桜』の忠信、俊寛、『本蔵下屋敷』の若狭之助、気違い幸兵衛、『大盃』の馬場三郎兵衛、『勧進帳』の弁慶、『鰻谷』の古手屋八郎兵衛、義士赤穂源蔵（赤垣源蔵と思われる）、『碁盤忠信』、渡海や銀兵衛実は平知盛、『吉原百人斬』のかさね、『地震加藤』の加藤清正、義士高田の馬場の十八人斬中山安兵衛（『尾上松之助自伝』前掲書）。

（12） 京都での興行を行う以前に既に「以前から見ていた芝居をことごとく自分の出し物としてしまって」いたことがわかる。（『尾上松之助自伝』前掲書）。

（13）「役者尾上松之助」（『演劇評話』、三宅周太郎、1928年、新潮社）。

（14） 中狂言「女定九郎」（実際の上演作品名としては「忠臣蔵後日建前」）も好評。「劇界」（『日出新聞』、1909年7月19日）。

（15） 出演者及び配役は松之助（忠信役）、市太郎（義経役）・嵐橘楽（覚範役）。

（16） 自伝では「乳房榎」「盲目景清」の公演後に「碁盤忠信」と「小夜千鳥浜の松風」を公演したと書かれているが、新聞や雑誌における興行情報では「乳房榎」、「盲目景清」の興行が確認できるのみで実際千本座で「碁盤忠信」「小夜千鳥」を上演したのかは今後の調査課題としたい。

（17） 牧野省三は松之助を主演にした映画製作を始

めた頃について、プリントを一本しか作らなかったため、全国の特約館・直営館からの注文にそれぞれ応じて、濫作して数を間に合わせていたと語っている。『日本映画発達史Ⅰ』（田中純一郎、1975年、中央公論社）176頁。

(18) 歌舞伎座では曾我廼家、大虎座では桃李会、朝日座は楽天会がそれぞれ喜劇を興行して人気を博していた。

(19) 明治42年から大正4年に渡って一座で上演された喜劇芝居の演目と配役を列挙する。「競争むこ」（1909.10.31、千本座／紳士朝山役）、「女尊男卑」（1910.01.01、千本座／婦人令子役）、「ドッグウード婦人」（1910.03.14、千本座）、「恋の辻占」（1910.04.14、千本座）、「便り」（1910.05.14、千本座／魚売りお貝役）、「田舎の先生」（1910.05.30、千本座／教員疋田役、1913.02.28、末広座・1913.03.10、末広座）、「挨拶違ひ」（1910.06.14／大工勘五郎役）、「盲根性」（1910.08.14、千本座）、「思はぬ恵み」（1910.10.01、千本座）、「恋の太刀風」（1910.10.14、千本座・1913.4.14、末広座・1913.04.30、末広座・1914.01.11、末広座）、「雪と酒」（1911.01.01、千本座）、「昨日の鬼」（1912.01.01、千本座）の12作品に上る。

(20) 「夕霧伊左衛門」（1912.01.14、千本座）、「桂川連理の柵」（1913.06.14、末広座）、「伊勢音頭」（1913.07.22、末広座）、「お園六三」（1914.12.31、末広座）、「お花半七花楓都模様」（1915.01.08、末広座）。

(21) 松之助映画作品については、拙稿「尾上松之助映画京都封切リスト（上）」（『NFCニューズレター』、第63号、2005.10、独立行政法人国立美術館／東京国立近代美術館）、「尾上松之助映画京都封切リスト（中）」（同誌、第64号、2005.12、同館）、「尾上松之助映画京都封切リスト（下）」（同誌、第65号、2006.02、同館）を参照。

(22) 「四季模様白縫譚」（1913.05.30）上演。

(23) 注11参照。

(24) 『日本映画発達史Ⅰ』前掲書197頁参照。

(25) 吉沢は日本もの、横田は優れた西洋輸入作品を興行すると評判で、興行館で吉沢が半額券を配付すれば横田は均一10銭の安値と作品入れ替えの早さで対抗していた。「色競べ（上）」（『大阪朝日新聞京都付録』1909年8月22日）。

(26) 日活の新年広告「謹迎大正新年」（『大阪朝日新聞京都付録』1913年1月3日）参照。

(27) これについては、以前からのストックフィルムの使いまわしもあったと推測されるが、今後の調査課題としたい。

(28) 注21で提示の資料を参照。

(29) その他同年の「実録忠臣蔵」（01.21、監督不明、日活、京都中央館封切）、「源平盛衰記」（03.01、監督不明、日活、京都中央館封切）、「実説　佐倉宗五郎」（04.26、監督不明、日活、京都中央館封切）、「立志美談　塩原多助一代記」（06.11、牧野省三監督、日活、京都中央館封切）などは作品内容や流れを掲載している。

(30) 1914（大3）年当時の映画興行館の新聞広告欄で名前が挙がっていた俳優としては、新派で活躍していた山崎長之輔一派や久保田清一などがいた。

(31) 弥満登音影株式会社の封切作品で松本幸四郎の名前が見られる（「特別広告」『大阪朝日新聞京都付録』1914年1月5日）。また、新京極・歌舞伎座の封切で初期の天然色活動写真株式会社の俳優として知られる市川海老十郎一座の名前が広告として掲載されている（「特別広告」『大阪朝日新聞京都付録』1914年11月30日、「タノシミ」同紙1915年1月1日）が、一座名はそれ以降新聞広告に見られない。

(32) 片岡松之助〔二代目〕（1868～1919）：大阪出身。10代目片岡仁左衛門の門人となり片岡多見丸として修行を積む。二代目片岡松之助襲名後の1891（明24）年大阪角座で「忠臣蔵作品」を演じてから赤穂浪士を扱った義士劇を演じて評判になった。

(33) 「明治座松之助一座の義士劇は全部で11場で」（「タノシミ」『朝日新聞京都付録』1914年8月25日）や「明治座松之助の義士劇は一昨夜から本稽古に取掛かつたが」（「タノシミ」同紙、同年

8月27日）という記事により読者が尾上松之助の実演と勘違いしたようで、「タノシミ」（同紙、同年8月28・31日）で明治座の松之助一座は尾上松之助ではなく別人である旨の注意が2度に渡り掲載されている。

(34) 「寄席と劇場（七）」（『日出新聞』、1912年1月20日）

付記—本報告は「尾上松之助と時代劇の系譜」展（会期：2005年4月5日～10月9日、主催：東京国立近代美術館フィルムセンター、協力：京都府京都文化博物館、立命館大学アート・リサーチセンター「マキノ・プロジェクト」）の関連で著者が発表した「尾上松之助映画封切リスト」（本文注21参照）作成過程での調査を一部反映している。調査に際しては、21世紀COEプログラム京都アート・エンタテインメント創成研究を支援するCOE推進機構客員研究員として研究費の補助を受けた。リスト掲載の機会を与えてくださった東京国立近代美術館フィルムセンターの入江良郎氏、校正でお世話になった同フィルムセンターの板倉史明氏また、資料調査では同フィルムセンター図書室、同志社大学今出川図書館にお世話になった。この場をお借りし感謝申し上げます。

尾上松之助芝居上演表（京都）

＊　本リストは出典とする『日出新聞』及び『大阪朝日新聞京都付録』の表記をそのまま採用した。

作品名	劇場名	上演年月日	出演者	松之助の配役	備考
前「浪花霊験記」、切「芦屋道満大内鑑」葛の葉子別れ。	千本座	1903(M36).02.05～	三枡源九郎改め尾上松之助一座→松之助、班松郎、琥三郎、璃笑、雁笑、鬼太郎。	矢部清兵衛・忠僕奴助・土井要	班松郎≒珏松郎
「紅葉時復讐美談」続6幕、「経済鑑塩原多助」、切「後日の加藤」阿蘇ヶ嶽閑居にて。	千本座	1905(M38).01.01～	松之助一座→尾上松之助、尾上玉之助、黒谷市之丞、澤村源笑、阪東可調、嵐三津五郎、嵐源之助、市川助十郎、市川升之丞、嵐三若、中村翫枝。	佐野鹿十郎・塩原多助・加藤勝之助	
「敵討天橋立」、「陸奥松風松前奇談」。	千本座	1905.01.15～	松之助、三若、珏松郎、源笑、玉之助、升之丞、獅錦、三津五郎、翫枝。	岩見重太郎・仲間七郎・池沢君太郎	
前狂言「二蓋笠柳生実記」幕なし、切狂言「古手屋八郎兵衛」鰻谷1幕。	千本座	1905.02.01～	尾上松之助一座→松之助、三若、珏松郎、市之丞、源笑、可調、獅錦、升之丞、三津五郎、翫枝。	柳生又十郎・古手屋八郎兵衛・でんぼ恵兵衛	
「肥後駒下駄」大序より大切迄、（「御所桜」）。	岩神座	1906(M39).02.28～	松之助、当二郎、寿昇、翫雀、大谷友吉一座。	不明。	
「義士銘々伝」8幕。	千本座	1906.11.30～	片岡市之丞一座＋尾上松之助。	不明。	
昼/「東海道妹背白浪」5幕、夜/「御文章石山軍記」6幕、切「松島台正直鑑」1幕。	千本座	1907(M40).01.01～	片岡市之正一座→松之助、梅暁、友太郎、冠蔵、松代、幸十郎、源二郎、森十郎、市昇、市之正。	番頭庄七・楠七郎左衛門・鈴木孫市	
前「先代騒動誉大久保」、中「清正公後日誉」、切・所作事「千本桜道行」。	大手座	1908(M41).01.01～	尾上松之助/片岡市若一座。	不明。	
前狂言「屋代騒動誉大久保」6幕、中狂言「忠臣蔵後日建前」1幕、切狂言「中山安兵衛実記」3幕。	千本座	1909(M42).07.14～	松之助、梅暁、都猿、友三郎、姉四郎、松代、森十郎、亀三郎、蝶十郎、栄次郎。	角左衛門・又助・彦左衛門・安兵衛	「誉大久保」中狂言「女定九郎」ともに好評判。
替はり狂言「糸桜本町育」3幕、中「伊達模様恋染分」子別れの段、切「無宿団七岩井風呂」3幕。	千本座	1909.07.31～	松之助、梅暁、都猿、友三郎、姉四郎、松代、富栄、森十郎、亀三郎、蝶十郎、栄次郎、鶴三郎。	絹五郎・重の井新左衛門・大次	
一番目「天一坊」6幕、二番目「大蔵卿」1幕。	千本座	1909.08.14～	松之助、嵐栄次郎、片岡市太郎、尾上梅暁、嵐都猿、市川森十郎、嵐松代、片岡蝶十郎。	大岡越前守・大蔵卿	
「仮名手本忠臣蔵」7段目まで幕無し。	千本座	1909.08.22～	嵐栄次郎、尾上松之助一座。	不明。	
前「怪談乳房榎」、切「月景清」。	千本座	1909.08.31～	橘楽、市太郎、森十郎、都猿、松代、友三郎、梅暁、蝶十郎、富栄、松之助。	（菱川重信）・下男正介・景清	
「梅魁天神利生記」（「宮本左門之助」）9幕。	千本座	1909.09.14～	嵐橘楽、尾上松之助等一座→橘楽、梅暁、市太郎、都猿、森十郎、多蔵、友三郎、松代、蝶十郎、松之助。	宮本左門之助（安本左門之助）・彦尾吉左衛門	
一番目「朝日御崎花子譚」5幕、二番目「気違幸兵衛」上中下。	千本座	1909.10.14～	橘楽、梅暁、市太郎、都猿、友三郎、友太郎、森十郎、松代、蝶十郎、松之助。	大野検校・船津幸兵衛	
一番目「御文章石山軍記」8幕、二番目喜劇「競争むこ」（「競争婿」）1幕。	千本座	1909.10.31～	橘楽、梅暁、市太郎、都猿、友三郎、森十郎、松代、蝶十郎、友太郎、静子、富栄、松之助。	楠七郎左衛門・鈴木孫市・紳士朝山	

作品名	劇場名	上演年月日	出演者	松之助の配役	備考
前「塩原多助」6幕、切「千本桜」渡海屋。	千本座	1909.11.13(11.14)～	橘楽、市太郎、友三郎、森十郎、松代、蝶十郎、丈之助、亀若、梅暁、松之助。	塩原多助・平知盛	
「檜山相馬大作」19場。	千本座	1909.11.22～	嵐橘楽、尾上松之助一座。	不明。	
前「赤穂義士伝」5幕、中「嫁おどし谷」1幕、切「吉例曽我対面」1幕。	千本座	1909.11.30～	橘楽、市太郎、松代、友三郎、梅暁、丈之助、鬼若、森十郎、蝶十郎、松之助。	浅野匠之頭・大石内蔵之介・母いばら・曽我五郎	
「名立花北国奇談」9幕。	千本座	1909.12.10	橘楽、市太郎、鬼若、友三郎、森十郎、松代、蝶十郎、梅暁、片岡亀次、松之助。	近藤忠之進	
昼の部「相馬大作誉檜山」7幕、/夜の部「実録小栗十勇士」8幕、切狂言喜劇「女尊男卑」3幕。	千本座	1910(M43).01.01～	橘楽、梅暁、蝶十郎、鬼若、友三郎、森十郎、松代、市太郎、時三、松之助。	相馬大作・小栗判官・風間・婦人令子	
昼の部「新年の雪」7幕/夜の部前狂言「実録大江山」8幕、中狂言「酒井太鼓」上下、切狂言「綴飾絵（ツヅリニシキヱ）」3場。	千本座	1910.01.14～	橘楽、梅暁、松代、市太郎、友三郎、鬼若、森十郎、時三、蝶十郎、松之助。	仁三郎・渡辺綱・酒井左衛門・百姓徳平	
「四季模様白縫譚」8幕。	千本座	1910.02.14～	橘楽、梅暁、市太郎、友三郎、松代、森十良、鬼若、時元、蝶十郎、松之助。	若菜娘・秋作・浪六	
「銀婚式淀礎」7幕、切「安宅関」1幕。	千本座	1910.02.28？	橘楽、梅暁、市太郎、松代、鬼若、森十郎、友三郎、富栄、静子、蝶十郎、時三、松之助。	篠崎又助・武蔵坊	
前「巌岩砕瀑布の勢力」5幕、中「大石内蔵之助」6場、切喜劇「ドツグウード婦人(ドツクー)」1幕。	千本座	1910.03.14～	橘楽、梅暁、市太郎、松代、森十郎、鬼若、友三郎、静子、小橘楽、蝶十郎、時三、松之助。	神力民五郎・大石内蔵之助・三浦忍	
「実録天下茶屋」28場。	千本座	1910.03.31～	橘楽、市太郎、梅暁、松代、友三郎、鬼若、森十郎、蝶十郎、時三、松之助。	片桐且元・安達元右衛門	「実録天下茶屋」は渋柿園氏作。
前「朝日晴伊賀実録」8幕、切「喜劇恋の辻占」1幕。	千本座	1910.04.14～	橘楽、市太郎、梅暁、友三郎、松代、鬼若、森十郎、小橘楽、蝶十郎、時三、松之助。	荒木又右衛門・夢の市蔵	
前狂言「新薄雪物語」4幕、切狂言「丸橋忠弥」。	千本座	1910.04.30～	橘楽、蝶十郎、市太郎、森十郎、鬼若、友三郎、梅暁、松代、時三、松之助。	民部・丸橋忠弥	
前狂言「傾城時代鑑」、切狂言喜劇「便り」。	千本座	1910.05.14～	橘楽、市太郎、梅暁、友三郎、荒若、蝶十郎、松代、鬼若、森十郎、時三、松之助。	藤浪由縁之丞・魚売お貝	
前狂言「日蓮大士真実記」(「日蓮上人実伝」)、切狂言喜劇「田舎の先生」(「あわてた人」)。	千本座	1910.5.31～	橘楽、市太郎、梅暁、松代、友三郎、森十郎、富栄、静子、鬼若、時三、蝶十郎、松之助。	日蓮上人・教員疋田	
前「景清譚」7幕、切喜劇「挨拶違ひ」1幕。	千本座	1910.06.14～	橘楽、市太郎、梅暁、松代、友三郎、鬼若、森十郎、富栄、丈之助、蝶十郎、松之助。	悪七兵衛景清・大工勘五郎	
前「蓬莱曽我」4幕、中「盲兵助」上下、切「御前角力」(「御前相撲」) 3場。	千本座	1910.06.30～	橘楽、市太郎、梅暁、松代、友三郎、鬼若、富栄、静子、森十郎、小橘楽、曾十郎、松之助。	畠山重忠・盲兵助・半井竹庵	
「大津絵仇討」(「吃又平」) 8幕。	千本座	1910.07.31～	橘楽、市太郎、鬼若、友三郎、梅暁、松代、森十郎、島五郎、松之助。	忠僕雷作（恵僕雷作）・吃又平	

作品名	劇場名	上演年月日	出演者	松之助の配役	備考
前「木津勘助」7幕、切喜劇「盲根性」(「盲目根性」)。	千本座	1910.08.14～	橘楽、市太郎、梅暁、松代、鬼若、島五郎、友三郎、森十郎、松之助。	木津勘助・将軍家光	
前「大和錦朝日の旗揚」、中「桂川連理柵」、切喜劇1幕(切「笑劇」)。	千本座	1910.09.10～	橘楽、市太郎、梅暁、鬼若、松代、森十郎、島五郎、友三郎、蝶十郎、松之助。	吉村虎太郎、猟師善太郎・長右衛門	
前「山中鹿之助」8幕、切喜劇「思はぬ恵み」1幕。	千本座	1910.10.01～	橘楽、市太郎、松代、為五郎等外10数名。→橘楽、市太郎、梅暁、松代、鬼若、友三郎、島五郎、玉右衛門、富江、森十郎、松之助。	藪中茨之助・大谷古猪之助	
前「文殊九助」25場(15場)、切喜劇「恋の太刀風」1幕。	千本座	1910.10.14～	橘楽、梅暁、松代、鬼若、玉右衛門、島五郎、友三郎、森十郎、松之助。	加藤慶助・高砂・頼母	
昼「宇都宮棟木建設」、夜・前「祇園祭礼信仰記」、中「元禄男」、切・喜劇「雪と酒」。	千本座	1911(M44).01.01～	松之助、橘楽一座。	不明。	
昼の部「敵討肥後駒下駄」7幕/夜の部前「橋供養誓文覚」4幕、次「八百屋お七」1幕、中「伊達系図萩一巻」1幕、切喜劇「昨日の鬼」3場。	千本座	1912(M45).01.01～	嵐橘楽尾上松之助一座。	不明。	
昼の部「二蓋笠柳生実記」7幕/夜の部・前「実録夕霧伊左衛門」4幕、中「真田幸村」2幕、切「葛の葉」2幕。	千本座	1912.01.14～	橘楽松之助一座。	不明。	
前「実録小栗判官」6幕、中「伊賀越」饅頭娘、切「中山安兵衛高田馬場仇討」。	末広座	1913(T2).01.01～	花仙一座/尾上松之助加入。	不明。	
「小笠原諸礼忠孝」通し。	末広座	1913.01.31～	尾上松之助/中村花仙一座。	不明。	
前「松竹梅三女仇討」6幕、切「義士伝赤垣源蔵」1幕。	末広座	1913.02.07～	尾上松之助一座。	不明。	
「筑紫潟血汐荒浪」博多米市丸一代記。	末広座	1913.02.21～	松之助一座。	不明。	
前・時代劇「生さぬなか」、切・喜劇「田舎の先生」。	末広座	1913.02.28～	松之助一座。	不明。	
前「生さぬなか」続き、切・喜劇「カンツリチーチヤー」。	末広座	1913.03.10～	尾上桃之助一座。	不明。	尾上桃之助≒尾上松之助。
前「鈴木主水噂白糸」3幕、中「中将姫雪責」1幕、切「慶安太平記」丸橋忠弥堀端より捕縛迄。	末広座	1913.03.14～	中村花仙/実川百々助/尾上松之助。	不明。	
前「千本桜」、切「都踊」。	大宮末広座	1913.03.31～	尾上松之助の一座。	不明。	
前「浪花奇談梅早咲」、中「東海道岡崎猫」、切・喜劇「恋の太刀風」。	末広座	1913.04.14～	松之助一座。	不明。	
前「影写朝日紫陽花」8幕、切「恋の太刀風」。	末広座	1913.04.30～	松之助一座。	不明。	
前「清水清玄恋面影」引抜「大正魁開化踊」、切「おさん茂兵衛大経師」上下。	末広座	1913.05.06～	尾上松之助一座。	不明。	
前「殿様勘次出世鏡」上中下、中「蓮如上人肉附の由来」上下・「東下り富士見曽我」。	末広座	1913.05.20～	尾上松之助一座。	不明。	
「実録先代萩」通し	末広座	1913.05.26～	松之助一座。	不明。	
「四季模様白縫譚」。	末広座	1913.05.30～	松之助一座。	不明。	
「実録石川五右衛門」。	末広座	1913.06.07～	松之助一座。	不明。	

作品名	劇場名	上演年月日	出演者	松之助の配役	備考
前「怪談乳房の榎」6幕、切・お半長右衛門桂川連理の柵」。	末広座	1913.06.14～	松之助一座。	不明。	
前「小夜千鳥浜松風」、切「吃又平」。	末広座	1913.06.21～	松之助一座/市鶴・鶴松加入。	不明。	
「元禄忠臣蔵」24場幕なし。	末広座	1913.07.07～	尾上松之助一座。	不明。	
前「忠孝美談」、中「双蝶蝶」引窓、切「小三金五郎」。	末広座	1913.07.14～	松之助一座。	不明。	
前「実録四谷怪談」、切「伊勢音頭」。	末広座	1913.07.22～	尾上松之助一座。	不明。	
前「相馬太郎」、中「本蔵下邸」、切「不破数右衛門」。	末広座	1914(T3).01.01～	尾上松之助/市川花仙一座。	不明。	
前「宇都宮釣天井」、中「深川利生記」、切「源平女三人仕丁」。	末広座	1914.01.14～	松之助/花仙一座。	不明。	
前「栗山大膳」、中「古手屋八郎兵衛」、切・喜劇「恋の太刀風」。	末広座	1914.01.31～	花仙/松之助一座。	不明。	
「元禄忠臣蔵」。	末広座	1914.02.21～	花仙/松之助一座。	不明。	
前「二階笠柳生実記」5幕、「小野道風青柳硯」、切「道中膝栗毛吸付石」。	末広座	1914.03.07～	三枡源五郎加入。	不明。	
前「石山軍記」、切「お園六三」。	末広座	1914.12.31～	尾上松之助/中村花仙一座。	不明。	
前「お花半七花楓都模様」、中「義士武士と馬子」、切「伊達模様恋染分」。	末広座	1915(T4).01.08～	松之助一座。	不明。	
前「傾城児雷也物語」、中「平家女護島」、切「籠釣瓶吉原百人斬」。	末広座	1915.01.14～01.23	松之助/照蔵一座。	不明。	